

「切る」技術にこだわって80余年

匠の技が光る！刃物メーカー

関西鋼業 株式会社

KKS KANSAI 関西鋼業株式会社



関西鋼業 株式会社

代表取締役：棕本 光雄 氏
 本社：兵庫県尼崎市東海岸町1-54
 創業：1938年
 社員数：24名
 事業内容：産業用機械刃物製造販売
 URL：<https://www.kansaikogyo.com/>



本 社 外 観

関西鋼業(株)は昭和13年の創業以来、一貫して切ることに社運をかけて追求し続けている。時代とともに切るものは変化するが、ものを切るというコア技術と、それを具現化する匠の技を持った職人達に支えられ、今日に至っている。今回は、代表取締役社長の棕本光雄氏に会社の創業や現在の事業について、また、実際に現場を紹介いただきながら、現場の取り組みや人材育成について幅広くお話を伺いました。

一 軍需関連製品から刃物へ

戦前～戦後の関西鋼業の歴史

当社は私の父、棕本哲次(享年100歳)が1938(昭和13)年に尼崎市の潮江に関西鋼業所を創業したのが始まりです。もともと父は立売堀の鉄鋼商社である、山本東作商店(現在のカネヒラ鉄鋼(株))に丁稚奉公に出ており、のれん分けをしました。創業当時は手づくりの小さなバラックで大砲などの軍需関連の製品を作っていたと聞いています。

その後、徴兵制度により父は通信兵として中国のハルビンに渡ります。帰還した父は会社を再開します。終戦後の日本は徐々に経済も回復し、1964(昭和39)年の東京オリンピックの頃には建設需要が大きく盛り上がり、民間企業は設備投資をし、鉄道や道路、ダムといった公共投資、住宅などへの投資も活発でした。その頃当社は手引き鋸やカンナ、のみなど、木材を切る刃物の製作を行っており、日本経済の成長とともに、会社も成長していきました。

東京オリンピックから3年後の1967(昭和42)年に騒音や煙を出す工場を埋め立て地に集約して工業団地をつくる計画があり、当社は現在の尼崎東海岸町である埋め立て地の尼崎鉄工団地に新工場を建設しました。

一 切ることをコア技術とし、

時代とともに変わるニーズに対応

住宅関連資材に次第に金属が多くなり使われるようになると、それに合わせて金属切断用の刃物の需要が高まり、生産をシフトさせていきました。

このように切るという技術、ノウハウを軸にして、時代とともに変わるニーズに応じていくのが当社の使命です。現在は道路などのコンクリートを切る刃物、スマートフォンや屋外の基地アンテナの中に入るICチップ部品を切断する刃物、食パンや食肉を切るための刃物も製造しています。

木材一辺倒、金属一辺倒では創業から82年間もの長きにわたって会社を守ることができなかったと思います。今の会社があるのは、これまでに培ってきた切るというコア技術と、刃物の製造に関するノウハウを活かして、時代のニーズに合った刃物を提供し続けてきたからに他なりません。また、父はその功績が認められ1985年(昭和60年)勲五等瑞宝章を受章しました。

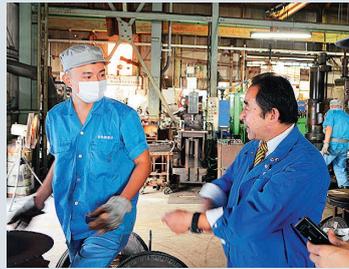
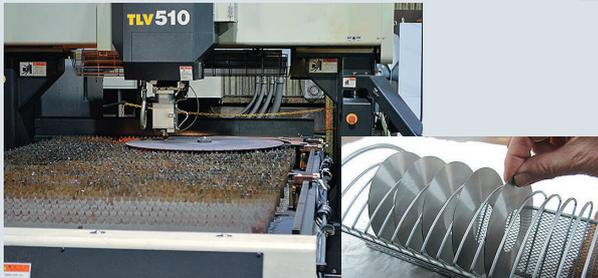
一 当社の事業 3つの柱

切ることをコア技術として、当社には3つ事業部があります。

まず1つ目が当社の従来からの事業である刃物を製作する刃物事業部です。切れ味、耐久性などに優れた、高

◆当社オリジナル仕様の装置により 高効率、高精度の加工を実現

2014年に二次元CO₂レーザー加工機
2016年にCNC横軸ロータリー精密平面研削盤
2017年に横軸ロータリー平面研削盤傾斜角度±20°
ものづくり補助金事業で採択された装置です。
他社が真似できない加工精度、熟練を必要としない
機械操作、量産可能な当社独自の機械設備を導入しました。



◆ベトナム実習生のナムさんと社長

当社では現在5名ベトナムからの実習生、エンジニアがいます。彼らは勤勉で上達も早く、日本語検定を取得している人もいます。来年の春には新たに2名の方に来てもらう予定ですので、指導にも力が入ります。



◆関西トロピカル食品事業

その他に、本社の2階ベランダに蜂の巣箱を設置して、純国産の無添加蜂蜜や、シロップなども製造・販売しています。

機能、高品質の刃物を生産するために、成型から熱処理、研磨工程を一貫して行っています。特に、最大直径220cmの焼き入れができるのは、全国でもわずか数社であり、独自の技術として、当社の競争力の源泉です。また、研磨技術についても、大型のものからミクロン単位の超小物、薄物の精密研磨まで対応が可能です。このような優位性のある独自の技術により、顧客のあらゆるニーズに対応しています。

2つ目は加工事業部です。刃物の切り出しに使用するレーザー加工機を使って受託加工行っています。レーザー加工の他にも研磨や切断なども依頼があれば行っており、困ったときに共存共栄ができるようにしています。

3つ目は機械事業部です。当社の刃物を搭載した各種機械設備の製造・販売を行っています。機械部品の製作、組立は外部で行いますが、設計段階では、当社の刃物や切ることにするノウハウが活かされます。また、試作品が完成した後は、何度も改良を重ねて製品化にこぎつけます。近年では、氷市場向けに「アイスカッター」を開発し、大好評いただいています。

—プライドを持ったものづくり 匠の技と品質へのこだわり

当社は82年の歴史があり、プライド

を持ったものづくりを行っています。当社のものづくりの特徴を2つご紹介します。

まず1つ目は刃物製作に携わる現場作業者の匠の技です。刃物の製造工程で、熱処理、研磨加工ではどうしても歪みや振れが発生します。これらを手作業で修正します。この作業は未だに機械化することができません。現在5名の職人が、手作業で1枚1枚金床(かなとこ)に加工品を置き、定規を当てながら隙間から漏れる蛍光灯の光の量を見て、ハンマーで叩いて微調整を繰り返していきます。この作業は熟練の技が必要であり、直径180cmの刃物の調整作業を習得するには最低でも10年かかると言われています。



もう1つは品質へのこだわりです。当社で製作した刃物は全て人の目で検査を行っています。治具を使い、内径・外径・厚みを検査するのはもちろんですが、割れの検査が特に重要です。過去に機械化を試みましたが、結

局作業と同じようにはできませんでした。拡大鏡を使い光の当て方、見る角度を変えながら2人体制で1日に100枚以上の製品をすべてチェックしています。作業は大変だと思いますが、この作業では割れはない、大丈夫だろうという視点で見るとはならず、どこかに必ず割れがあるだろうという気持ちで見られています。不思議なものでそれだけで発見する精度が変わってきます。この厳しい検査により当社の品質管理が徹底されています。

—会社の将来に向けて

私は会社をこれ以上大きくしたいとはあまり考えていません。昨今のように社会状況が予測不能になった場合でも、手の届く範囲で対応できる今の規模(少数精鋭)が良いと思っています。

しかし、社員がやめてしまうということにもなりません。人は財産です。仕事にやりがい、楽しさを感じてもらい、家庭円満な生活が送れるように環境を整えていきたいです。

これからも社員と共に、切るというコア技術を武器に社会のニーズに合った製品を提供し、社会に貢献していきたいです。

—貴重なお話をいただき、 誠にありがとうございました